近畿

異業種からの農業参入～多様な担い手に注目！～

新規参入の促進や担い手の確保・育成などが重要な課題となっており、近年では多様な担い手が注目されている。そこで、今回は多様な担い手に注目し、異業種から農業参入した個人・法人の取り組み、参入した動機、異業種出身者から見た農業の魅力などを紹介する。

酒造りは酒米の自社栽培から

栽培面積拡大、若手育成にも力

亀岡市　丹山酒造

【京都】亀岡市の丹山酒造㈲は、自社で使用する酒米を安定的に確保するため、農地所有適格法人の㈱メイドイン京都を設立し、市内の水田（旭・馬路・河原林町の約13㌶）で、自社栽培した酒米による酒造りに力を入れている。

同社は、「酒造りは米作り、米作りは土壌から」という理念を実践するため、酒粕などをペレットにした自社製有機肥料を使用して栽培するなど、「自信を持って顧客に薦められる酒造り」に取り組み、京都市内の直営店で順調に売り上げを伸ばしている。

地元亀岡に根ざした酒造会社として、地域との関係を大切にしており、「地域計画」の話し合いに長谷川渚社長（47）が積極的に参加して農地の借受希望を伝えている。

将来的に自社で必要な酒米を全量生産できる25㌶まで栽培面積を拡大することを目標に掲げて、若手の農業専従職員の育成にも取り組んでいる。（会沢仁史）

㊧丹山酒造の長谷川渚社長（左）と従業員の長谷川琢真さん、㊦苗を運ぶトラック

温かいふれあいの場育みたい

元プロ野球選手が有機農家カフェ経営

神戸市　稲垣将幸さん

【兵庫】神戸市西区にある「C－farm（シーファーム）カフェ」代表の稲垣将幸さん（32）は、四国の独立リーグでプロ野球選手として活躍していたが、選手時代に訪れた稲作農家での体験もあり、引退後に就農を決意。2020年から有機農業の研修をスタートして、22年11月に有機農家カフェをオープンした。

「畑に囲まれた場所で、農業体験もできるカフェを作りたい」との思いから、約1・2㌶の農園で自ら栽培する「神戸の有機野菜」にこだわったカフェを始めた。

約10品目の有機栽培野菜セットを販売するほか、学校給食のオーガニック化や食育授業などの事業にも積極的に協力している。

「体が資本の野球を通して、自然環境と健康に優しい有機農業の大切さを感じた。地域と未来のため、農業とカフェが織りなす温かいふれあいの場を育んでいきたい」とさわやかな笑顔が輝いた。（山口昭彦）

カフェで農業への想いを語る稲垣さん

地域と自然をつなぐ農園に

菓子ショップと田畑、四季折々の景観に

近江八幡市　キャンディーファーム

【滋賀】和菓子・洋菓子を販売している「たねやグループ」は、地域の仕事やコミュニティーを生みだす目的で農業に参入。近江八幡市に自社農園「キャンディーファーム」を設立した。「自然に学ぶ」をテーマに農業や自然に触れる場づくりを行っている。

その象徴と言えるのが、年間約400万人が訪れる和洋菓子のショップとカフェ、田畑が調和した旗艦店「ラコリーナ近江八幡」だ。

約12㌶にも及ぶ広大な敷地の中央には田んぼが広がり、社員が手作業で田植えや稲刈りを行い、自然と向き合いながら米作りの苦労や大切さを学んでいる。

ラコリーナの田園と小玉さん

また、約500種類、3万株の山野草を育て、全国の店舗へ週に1度寄せ植えを出荷し、近江の自然を店頭でも感じられるよう工夫している。草屋根が印象的なラコリーナでは、四季折々の景観を楽しめる。

同社担当の小玉恵さんは「伝統文化や地域の景観を守り続けるため、自然を通じて学ぶ場を提供し、自然と調和した未来づくりに取り組んでいきたい」と語った。（福井かれん）

異業種の技術でビジネスチャンス

空調システム活用しイチゴ生産

河南町　KANSOテクノス

【大阪】関西電力の子会社で環境・土木・建築などの事業を主とする㈱KANSOテクノスは、河南町のハウス約90㌃でイチゴを生産している。

経営理念である「豊かな地域社会の実現」と、蓄積した農業電化技術のノウハウを活用するため、大阪府が主催する「いちごアカデミー」の受講を経て、2020年に本格的に農業に参入した。

同社の強みは、親会社が特許を取得した「局所空調システム」の活用だ。株の根元へピンポイントでヒートポンプから冷気を送り込むことで、8月からの植え付けが可能となり、約1割の増収にもつながっている。

同社の辻本正直チーフマネージャーは「農業には、異業種の技術を導入することでビジネスチャンスを生みだせる魅力がある」と話す。

今後は10㌃当たり6～7㌧の収量達成とフランチャイズ化を視野に入れ、ハウスリースや人手確保など地域と連携した新しい事業モデルを模索している。（林佑一郎）

一昨年にはJGAP認証を取得。イチゴでは府内唯一の認証例

イチゴのおいしさ広めたい

前職の経験、安定経営に活かす

香芝市　中西久典さん

【奈良】「前職で培ったスケジュール管理などを活かし、安定した経営につなげられるようにイチゴ栽培に取り組んでいる」と話すのは、香芝市の中西久典さん（40）だ。中西農園の経営者として、ビニールハウス20㌃で古都華など5品種のイチゴを高設栽培している。

実家が水稲やイチゴを栽培しており、幼少期から手伝っていた。化学関連の製造会社に就職したが、30代に入って本格的に後を継ぎたいとの思いから退職し、2019年に就農した。

その後、奈良県立なら食と農の魅力創造国際大学校に入学し、栽培技術をさらに磨いた。現在は自身の農園や直売所で販売するほか、Webサイト・アプリ「じゃらん」でイチゴ狩りの予約を受け付けしている。

中西さんは「採れたてのイチゴを味わってほしい。リピーターを増やすために、品質をさらに高めたい」と意気込む。（木村将史）

時間をかけて栽培したイチゴで喜んでいるお客さんを直接見ることができるのが魅力」と話す中西さん

食と命、考える機会作りたい

看護師から養鶏農家に転身

有田川町　古田雄也さん

【和歌山】「就農したことで食と命に対する意識が変わった」と話すのは、有田川町の肉用鶏農家・古田雄也さん（34）だ。

看護専門学校を卒業後、大学病院や訪問看護ステーションで8年間、看護師として勤務。2021年、30歳のときに義父が経営する㈲御坊チキンに転職し、養鶏農家となった。

元々起業に興味があった中で、義父が引退後に規模縮小を考えていると知り、転職を決意。現在は同社で常務取締役を務め、「紀州うめどり」も生産する。

自身の経験を小中学生に伝える食育活動にも積極的に協力する。「子どもたちが食と命について考える機会を得ることで、将来さまざまな物事に向き合うときの選択肢を増やしてほしい」と語る。

今後は、自社の強みを活かした事業展開への挑戦や、従業員の労働環境をより良くするための制度づくりなどへの取り組みを目標としている。（鹿嶋俊宏）

「自社の鶏肉を使ってくれる飲食店とつながれることがうれしい」と語る古田さん

近畿総局
京都府農業会議
京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 府庁西別館内
075・441・3660
滋賀県支局　077・523・2439
大阪府支局　06・6941・2701
兵庫県支局　078・391・1221
奈良県支局　0742・22・1101
和歌山県支局　073・432・6114